2019 年度　FD 活動の取組み

1. FD 研修会「各種学生アンケートの分析報告」

講師：高橋　徳行　（FD 委員長、経済学部教授）
　　目時　壮浩　経済学部准教授
　　垂見　裕子　社会学部教授
　（※講演順）
日時：2019 年６月 13 日（木）　14 時 40 分～16 時 10 分
場所：武蔵大学６号館 6201 教室

〈研修会の概要〉

本年度の FD 研修会の日程は、昨年度と同様に多くの教員が参加できるようにと６月の教授会の日程に合わせての実施となった。

本年度は、各種学生アンケートの分析結果について研修会を実施した。

最初に高橋 FD 委員長から、2018 年度 FD 活動の新規取り組み事項および継続取り組み事項等について報告がされた。次に経済学部の目時准教授から、2015 年度～2018 年度の卒業生のデータおよび在学生のデータを用いた分析結果について講演がなされ、最後に社会学部の垂見教授から大学 IR コンソーシアム学生調査を用いた分析結果について講演がなされた。

初めに高橋 FD 委員長より 2018 年度からの新規取り組み事項として、授業評価アンケートの Web 化、授業評価アンケートの設問にディプロマ・ポリシーに対応する項目を追加（実施は 2019 年度より）、学生が選ぶベストティーチャー賞にゼミ・演習部門を新設したとの紹介がされた。

続いて、授業評価アンケートを Web 化し学生個人の成績等と関連付けが可能になったことによって得られたデータについて、図表をもとに報告された。

次に、目時准教授より本学の入試制度ならびに教育制度の検討を行うための、１．卒業時 GPA に関する分析、２．TOEIC®スコアに関する分析、３．SPI スコアに関する分析（補論．GPA，TOEIC®，SPI の高い学生の就職先企業）、４．入試方式と CASEC に関する分析、５．ゼミの満足度に関する分析結果の報告がなされ、各学部および入試形態ごとに分析結果に差がある項目があったことが示された。

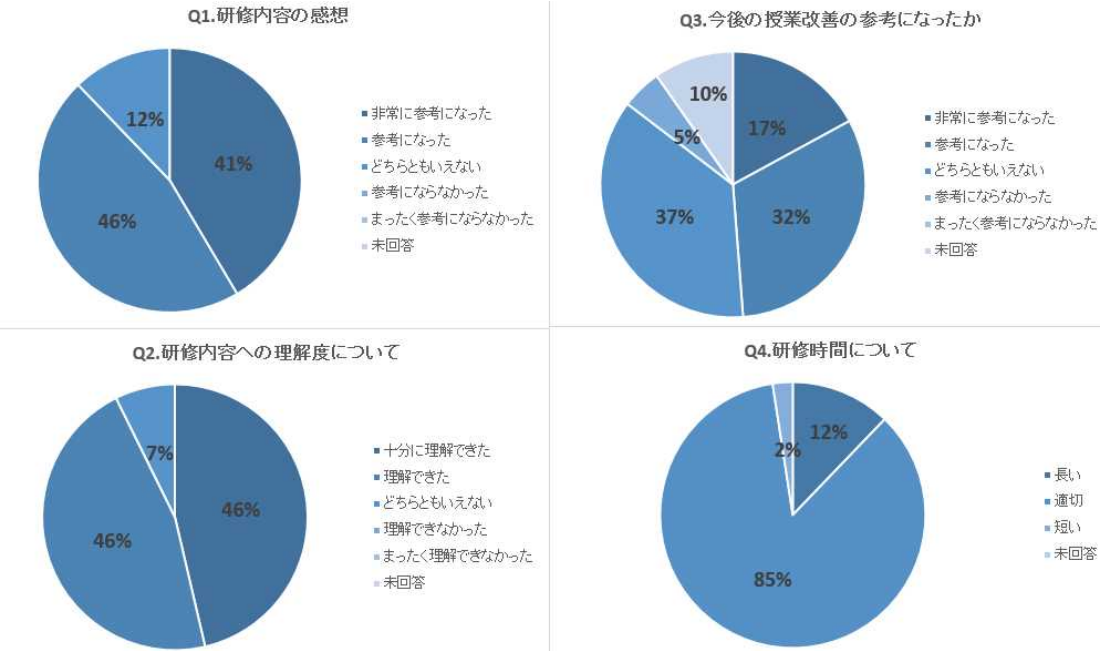
最後に、垂見教授から１．学生の英語運用能力、２．学生が入学後に習得している能力や知識、３．学生の授業時間外学習時間、４．学生のキャリア観について分析内容が報告なされ、大学 IR コンソーシアム学生調査は分析に望ましいデータではあるが回収率が低いため分析精度を上げるためにも回収率の向上が望まれるとの報告がなされた。

研修会後のアンケートにおいては、参考になったとの回答が 87%（非常に参考になった 41%、参考になった 46%）、研修内容の理解度 92%（十分に理解できた 46%、理解できた 46%）、授業改善の参考になった 49%（非常に参考になった 17%、参考になった 32%）との回答が得られた。また、研修時間について適切との回答が 85%であった。今後、さらに授業改善の参考とする研修会とするために分析結果をどのように授業改善に活用するのかといった観点等から実施する必要があると思われる。

（文責：高橋 徳行）

研修会の様子

2019 年度 FD 研修会受講者アンケート結果



2. 大学院懇談会

司会：目時 壮浩（経済学部准教授）
日時：2019 年 7月 26 日（金）13：00～14：30
場所：武蔵大学 7号館 7113 教室

前学期授業終了時の7月 26 日（金）に、今年度の大学院懇談会が開催され、大学院生 11 名（経済学研究科 5 名、人文科学研究科 6名）、教職員 16 名が参加した。今年度も6月中旬から下旬にかけて「大学院の教育・研究環境に関するアンケート」を実施し、経済学研究科から6名、人文科学研究科から 15 名の回答を得た。懇談会では、このアンケートの結果をもとに大学院生と教職員との間で具体的に意見を交換した。内容は以下のとおりである。

１．教育内容・方法

(1) 履修可能な科目について

昨年度も同様の意見がみられたが、博士後期課程の学生は、博士前期課程の学生が履修しなければ、前期課程の科目がそもそも開講されないため、それらの授業を受講する機会が失われる、という点が指摘された。柔軟な履修が可能となるよう教務課にて継続的に検討いただきたい。

(2) 指導教員の選択および変更について

他大学から本学大学院への進学の場合、指導教授の専門分野や指導方針等が十分にわからないために、自身の研究関心と異なる指導教授を選択してしまう場合がある。しかし、本学では指導教授変更や専攻分野の変更に関する明確なルールが存在せず、度々問題が生じているとの意見があった。この点、指導教授の変更については、すでに対応が検討されているものの、転専攻について専攻ごとにアドミッション・ポリシーが異なるため、入学後の転専攻は難しいのではないかとの議論があった。この点については、入試課も交え、継続的に議論していく必要がある。

２．研究・教育支援について

(1) 研究旅費の利用要件の緩和

大学院生に対する研究費として支給されている「大学院生調査員等制度」の利用要件の緩和に関する意見があった。現在、学会旅費の支給の要件として、学会報告が義務づけられているが、学会報告を行わずとも情報収集目的で学会に参加することもあるため、利用要件を緩和して欲しいとのことであった。この点、教員からも賛同する旨の発言もあったが、大学庶務課としては研究費に関する規程を変更して間もないため、もう少し様子を見てから検討したいとのことであった。

(2) 修士論文提出時のとじ込みファイルの共通化について

人文学研究科の学生から、修士論文のとじ込みファイルを共通化し、それを院生共通費で支出してもらうことはできないかとの意見があった。この点については、大学庶務課も交えて検討していただく。

(3) 文献資料等データベースの不足について

研究を遂行するうえで文献資料等のデータベースの充実は必須であるが、本学のデータベースでは十分な文献が入手できないとの意見があった。分野によってデータベースの充実度に偏りが大きく、入手する必要がある文献のほとんどが本学データベースでは入手できないという声も聞かれた。この点、図書館からは予算的にデータベースの充実をはかるのは困難であるため、武蔵大学の学生も利用可能なテンプル大学ジャパンキャンパスのデータベースを利用したり、ILL（図書館間の資料相互貸借サービス）を利用してほしいとの回答があった。

３．図書館について

(1) 図書館開館時間について

図書館の開館時間を延長できないかとの意見があった。とりわけ、洋書プラザが 18 時で閉館してしまうため、社会人院生の洋書プラザ利用が困難であるとのことであった。この点、図書館より、

開館時間の延長は難しいが、本館は 21 時まで開館しており１F カウンターで必要な洋書を請求することによって洋書プラザ内の資料を利用することは可能であるため、そちらを利用してほしいとの回答があった。

(2) 東アジア関連の洋書の充実について

本学の図書館には東アジア関連の図書が非常に少なく研究に支障があるとの意見があった。しかし、本学の図書館予算では、東アジア関連の洋書を利用する学生が相対的に多くはないため、すぐに充実をはかることは難しいとの回答があった。

４．院生研究室について

院生研究室の利用時間は現在７時から 21 時 50 分となっているが、これをさらに伸ばしてほしいとの意見があった。しかし、他の教職員も同時間帯でのみ大学施設を利用しているため、院生研究室のみ利用時間を延ばすことは難しいとの回答があった。

書面の都合上、当日話し合われたすべての事項について掲載することはできないが、今年度は多数の大学院生が出席し、忌憚のない数多くの意見が出された。今後も継続的に大学院生との意見交換を行い、研究環境の充実をはかることが求められる。

（文責：目時 壮浩）

懇談会の様子

3. FD フォーラム「学生と共に考える授業改善－専門ゼミナールや演習等の授業運営について－」

司会：高橋　徳行　（FD 委員長、経済学部教授）、水口 拓寿（人文学部教授）
担当：目時 壮浩（経済学部准教授）、水口 拓寿（人文学部教授）、人見 泰弘（社会学部准教授）
日時：2019 年 11 月 21 日（木）16:30～18:00
場所：武蔵大学１号館 1201 教室

〈趣旨と概要〉

武蔵大学 FD フォーラムは、学生が授業改善に向けて提案を行い、それを受けて学生と教職員がともに授業改善の方途を検討する企画である。FD 活動の中でも、特に学生を主体とするものであり、学生アンケート等では知ることができない生の声を受けて、教職員・学生が一体となり、課題について検討することを目的としている。今年度は、学生９名、教員 14 名、職員 14 名の計 37 名が参加して行われた。授業改善の提案を行った学生登壇者と、提案スピーチのタイトルは以下の通りである。

(1) 経済学部　経営学科４年　君嶋 祐治さん
　　「ゼミの武蔵が誇れるところ、今後期待するところ」
(2) 人文学部　日本・東アジア文化学科３年　藤井 裕作さん
　　「履修時の演習の３S での公開について」
(3) 社会学部　社会学科３年　出島 由香子さん
　　「方法論ゼミを履修して」
(4) 人文学部　英語英米文化学科２年　岩本 雄伍さん
　　「より良い教育環境のために」

本年度のフォーラムでは、「専門ゼミや演習等で学んで役に立ったこと、もっと教えてほしかったこと」というテーマを設けて、学生からの提案を募集した。これは、武蔵大学の伝統である「ゼミの武蔵」を踏まえ、ゼミでの教育を一層充実させるために設定されたものである。昨年度のフォーラムでは、テーマの一つとして「１年生の時に役に立ったこと、教えてほしかったこと（初年次教育）」を立てていたが、今回は、各学部・学科の２年次生以上が履修する「専門ゼミ」や「演習」等が検討対象となった。

フォーラムは 16 時 30 分に、山嵜学長による開会挨拶によって開会され、続いて高橋委員長の司会のもと、学生４名による授業改善の提案がパワーポイントを用いてなされた。その後、参加者全員による討議が 17 時より始められた。学生４名による提案の部では、参加者全員が教室前方に注目するように着席したが、討議の部に入る際に、一同が車座になって話せるように椅子を並べ替えた。

〈提案および論点〉

- 専門ゼミや演習等で学んで役に立ったこと／履修して良かったこと（順不同）
  - ✧ 議論する能力、プレゼンテーション能力の習得。
  - ✧ ディフェンス能力、批判的な視点の習得。
  - ✧ グループワークの魅力。
  - ✧ 毎回何らかの情報交換や意見交換ができた。
  - ✧ 社会調査の実践によるスキル習得と、それによる卒論計画の具体化。
  - ✧ 少人数の演習（例えば、学生１名）ならではの、卒論計画に密着した学習。

- 専門ゼミや演習等でもっと教えてほしかったこと／今後に期待すること（順不同）
  - ✧ 学生の発表が、課題をこなすことや、調べたものの報告に止まりがち。

- ✧ 発表内容を踏まえた、発展的な議論が起こりにくい。
- ✧ 討論の時間が少ない。
- ✧ １年間かけて学んだ成果を発信する場が足りない。
- ✧ 「ゼミの武蔵」のブランドイメージ向上のため、①ゼミ大会（経済学部）の四大戦、②ゼミに関する学外のコンテストに、学生が積極的に参加すること、③大学ホームページで学生がゼミ活動を報告することを提案。
- ✧ ゼミ・演習の履修登録方法の変更を提案。
  - ➢ 全員がゼミ（経済学部）を履修できることへの疑問。
  - ➢ 演習科目（人文学部）を一律に、３Sで履修登録可能とすることを提案。
  - ➢ ゼミ（社会学部）の配属決定にあたり、選考の実施を提案。
- ✧ ゼミ・演習に先立って履修するべき、教養的かつ応用可能性の高い科目が、更に増やされることを提案（例えば、言語学）。

〈討議〉

学生登壇者による提案を踏まえて、全体で討議がなされた。まず、登壇者への質疑がなされたあと、教員の側や教務部から学生の提案に対する回答がなされ、提示された論点を踏まえた自由討議となった。

紙数の関係で、討議の内容を逐一報告することはできないが、教員の側からも学生一般に関して、ゼミ・演習を履修するモチベーションの低い者、講義科目のように受け身の姿勢で出席する者、グループワークにあたりビジョンの共有が不十分である者、授業外学習時間の乏しい者が少なくないこと、またゼミ・演習の場に、発言を牽制しあうような雰囲気が見られること等が指摘された。それに対して参加学生からは、「自分がゼミや演習に参加する際には、意識が高くて当たり前だと思っている」等のレスポンスが聞かれた。特にこの点を筆録しておく。

〈所感・今後の課題〉

わたくし自身、FD フォーラムには初めての出席であったが、良い意味で「意識の高い」学生諸君が、登壇者４名を初めとして大勢参加し、積極的に発言してくれたことに、委員会の一員として謝意を表する。今後は更に多数の、かつ多様な学生がフォーラムに集い、授業改善のための意見を聞かせてくれることを望む。

（文責：水口 拓寿）

プレゼンテーションの様子

学生と教職員による討議

参加学生

4. 教員 FD 研修報告

〈研修の概要〉

テーマ：令和元年度 FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）
「大学教員の職能開発と FD」
日　程：2019 年８月６日（火）～７日（水）【A 日程】
場　所：グランドホテル浜松（静岡県浜松市）
主　催：一般社団法人　日本私立大学連盟
参加者：中嶋　幹（経済学部准教授）

〈研修の目的〉

高大接続改革に伴う私立大学の教育の質向上のために、一般社団法人日本私立大学連盟が新任専任教員を対象とする研修を継続的に実施するもの。

〈主なプログラム〉

【１日目】

- 全体説明／FD 推進ワークショップ運営委員会委員長　沖裕貴（立命館大学）
- 模擬授業説明／FD 推進ワークショップ運営委員会委員　耳野健二（京都産業大学）
- グループ討議（自己紹介、課題の共有）
- 模擬授業ワークシート作成（２日目の課題である模擬授業の概要をまとめるもの）
- 懇親会

（１日目の概要）

研修に先立って、立命館大学教育開発推進機構教授の沖裕貴先生による「全体説明」が行われた。最初に、FD 推進ワークショップ運営委員会として、2012 年の中教審による答申（2012 年８月 24 日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（中央教育審議会答申）」）を重要課題として認識していることが説明された。具体的には、①「プログラムとしての学士課程教育」という概念の定着、②学修支援環境の整備、③高大接続・連携の改善、④社会と大学の接続の改善の４点である。次に、本研修の目的が、課題①（「プログラムとしての学士課程教育」という概念の定着）に関する１）基本的な認識の共有および２）教育方法に関する技術の向上に資することにある点について説明された。「プログラムとしての学士課程教育」の概念定着のためには、学生に求められるディプロマ・ポリシー（DP）をどのようなプログラムで育成するかをカリキュラム・ポリシー（CP）として明示する必要があるとされ、大学教員はプログラム全体の中で個々の授業科目がどのように位置付けられるかを認識し、他の授業科目と連携しながら組織的な教育を実施することが求められる。本研修においては、１）基本的な認識を共有するために、カリキュラム・ポリシーを意識して模擬授業ワークシートを作成することが重要となる。他方、２）教育方法に関する技術の向上は、模擬授業（２日目）を通じて達成される。具体的には、参加者が模擬授業を行い、その後、ワークシートに従って模擬授業が行われているかを全員で検討する。以上が「全体説明」の概要である。

続いて、京都産業大学現代社会学部教授の耳野健二先生による「模擬授業説明」が行われた。模擬授業は、模擬授業ワークシートをもとに 15 分間で行われ、その後、15 分間の意見交換が行われる。模擬授業の形式は、参加者全員が教員役と学生役を体験するというものである。また、使用できる教具はホワイトボードのみであり、対面コミュニケーションに集中することが求められる。模擬授業を通じて、参加者それぞれが授業改善の手がかりをつかむことがここでの目的である。

「全体説明」、「模擬授業説明」が終了した後、「グループ討議」において各参加者が直面している課題について話し合われた。小職のグループ参加者の多くが指摘した課題はゼミ運営の方法論であった。これについて、「学生にゼミにおける質問の仕方を説明する」、「ゼミで発表した内容に対する質問については、その回答を次回ゼミまでに用意させる（議論を深化させるために、その場で回

答させずに準備期間を設ける)」といった工夫が挙げられたほか、「予め発言内容をメモに用意させると学生の発言が促進される」という意見があった。また、「ゼミで議論したいことを学生間で相談のうえ決定させる」、「ゼミの討論を仕切る役割も学生の仕事とする」といった運営事例も紹介された。

グループ討議後、参加者は自室にて模擬授業ワークシートを作成した。ワークシート作成においては、授業案の概要について「導入」「展開」「まとめ」の３段階に分けて授業の流れと時間配分を示した上で、各段階において「教員の活動」「学生の活動」「留意点」を記載する必要がある。その際、前述したように、DP の関連が明らかになるように、模擬授業の内容と CP の位置付けを明らかにすることが求められる。２日目の模擬授業では、このワークシートが参加者に事前に配布され、模擬授業担当者はワークシートに従って模擬授業を行う一方、模擬授業担当者以外の参加者は、ワークシートと整合的な授業が行われたかどうかを評価する。

【２日目】

- 模擬授業（模擬授業、意見交換）
- 全体ふりかえり

（２日目の概要）

２日目は、各グループに分かれて模擬授業が実施された。各グループは６～７名の参加者と１名の運営委員（コーディネーター）から構成される。全参加者がワークシートをもとに 15 分間の模擬授業を行い、その後、15 分間の意見交換を行う。授業担当者が使用できるのはホワイトボードのみであり、PC などの機材は使用できない。これは、言葉と文字のみによる授業の原点に立ち戻ることを企図したものであり、対面的コミュニケーションに集中することが求められる。模擬授業担当者以外の参加者は学生役を担当する。すなわち、学生の視点から模擬授業を観察し、授業の評価をコメントするほか、①授業の手法、②授業案、③総評をコメント用紙に記入する。このコメント用紙は、運営委員が取りまとめて各参加者に手渡される。このような相互評価を通じて、参加者が授業改善の手がかりをつかむことが期待される。

模擬授業終了後、「全体ふりかえり」が行われた。そこでは、模擬授業のグループが異なる参加者から構成されるように改めてグループ分けが行われる。次に、各々が所属した模擬授業のグループで発見された気付きを共有する。その結果、全てのグループの気付きが参加者全員で共有されることとなる。こうして２日間にわたる研修が終了した。

〈研修を通じて得られた知見〉

研修を通じて小職のグループが得た知見は「教員の熱意が模擬授業の成否を決定する重要な要因となり得る」というものである。具体的には、教員のもつ雰囲気、話し方、板書の方法などである。これらの要素は、教員の熱意が授業スタイルに反映されたものと考えることができる。小職のグループは７名から構成されており、各参加者の専門領域は様々であった。しかしながら、どのような専門領域であっても、模擬授業を通じて学問の楽しさを十分に感じることができた。何より、教員自身が楽しそうに授業する様子が印象的であった。従って、逆説的ではあるが、教育方法に関する個々の技術を習得する以前に、学問の魅力を学生に伝えようとする熱意が重要であるように思われる。学生は教員の熱意を敏感に感じ取っているのではないか。これは模擬授業の学生役になって気付いたことであり、自身が本学で授業を担当する際に留意したい点である。

次に、小職の模擬授業に対するコメントのうち、すぐに改善に役立てることができるものを紹介したい。小職は立ち講義を想定した模擬授業を行った。それゆえ、授業内容の組み立てに注力する一方、聴講する学生への配慮が不足していた。例えば、「学生が頭を整理する時間を授業内に設けるとよい」、「隣同士の学生で疑問に思ったことを言い合える時間があるとよい」といった指摘があった。これらの指摘は、授業の内容以外においても授業改善の余地があることを示すものである。続いて、他の参加者による模擬授業で参考になった点を１つ指摘しておきたい。それは、学生全員を授業に参加させるための工夫である。立ち講義はもちろんゼミ形式の授業であっても、学生や教員間の対話は１対１になりがちである。従って、討論に参加しない学生が置き去りにならないようにすることが求められる。この点については、「討論のテーマを誰でも取り組めるレベル感に設定する」、「授業における重要な点については板書を消さずに残しておく」、「必要に応じて専門用語を言

い換える、アイコンタクトを適宜行う」といった指摘があった。これらの指摘は、本学のゼミ運営においても有益なものとなろう。最後に、このような有意義な研修に参加する貴重な機会をいただいたことに感謝したい。

（文責：中嶋　幹）

5. 教務 FD「ルーブリック、カリキュラム・マトリックス」の活用について

土屋 直樹（教務部長）

中央教育審議会「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」では、「学生が『何を学び、身に付けることができたのか』という点に着目し、教育課程の編成においては、学位を与える課程全体としてのカリキュラム全体の構成や、学修者の知的習熟過程等を考慮し、単に個々の教員が教えたい内容ではなく、学修者自らが学んで身に付けたことを社会に対し説明し納得が得られる体系的な内容となるよう構成することが必要となる。」と明示されている。このことを踏まえ、2019 年度の教務 FD では、学生の自主的な学修を支援するため、学修成果の可視化に向けて取り組んだ。

● 「卒業論文・専門ゼミナール修了論文ルーブリック」について

2018 年度末に承認された「卒業論文・専門ゼミナール修了論文ルーブリック」を４月に３S 掲示として全学生に配信した。掲示ではルーブリックに関する説明を記載し、自己評価ツールとして使用するよう勧めている。

活用方法は各学部・学科の判断に任せることとしていたが、内部質保証委員会よりルーブリックの実質化と活用方法について検討するよう指摘され、2019 年９月より再び検討を開始した。議論の結果、12 月の教務部委員会にて以下を決定した。

- 公開されている「卒業論文・専門ゼミナール修了論文ルーブリック」を一部修正する
- 教授会で異論がなければ、公開済のファイルを取り下げ、修正版を３S で全学生と全教職員に公開する
- 教授会にて、各学部・学科での活用を検討いただく

１月 16 日の教授会にて教務委員長より上記が報告され、各学部で内容の確認と意見交換がなされた。経済学部と社会学部では、教務部委員会の内容から変更はなされなかった。人文学部では、２月 11 日の教授会で内容の修正がなされ、承認された。2020 年４月に修正版のルーブリックを３S 全学生でおよび全教職員に公開予定である。

● カリキュラム・マトリックスについて

カリキュラム・マトリックスとは、本学のディプロマ・ポリシーで示す学生に身につけてほしい知識・能力・態度を整理し、それらがどの科目と結びついているかを示した表であり、本学でも 2018 年度より大学 Web サイトに掲載している。学生はカリキュラム・マトリックスを参照することで、各学部・学科のカリキュラムのなかで、それぞれの科目がどのように位置づけられているのかを理解することができ、履修計画を立てる際も活用することができる。カリキュラム・マトリックスに関して、2019 年度は以下を実施した。

１．カリキュラム・マトリックスの再検討

経済学部専門科目のカリキュラム・マトリックスについて再検討がなされ、12 月の教授会にて修正版が報告された。大学 Web サイト掲載版も差替を行った。

２．カリキュラム・マトリックスの実質化に向けての活動

カリキュラム・マトリックスの実質化のためには、各授業担当者がカリキュラム・マトリックスで示されている知識・能力・態度を意識し、それらが身につく授業を展開する必要がある。以前よりシラバス入稿ガイドにカリキュラム・マトリックスの URL を明示し、授業計画にあたり参照いただけるよう依頼しているが、2020 年度シラバス執筆依頼時に、山嵜学長（内部質保証委員会委員長）発信文書「シラバス執筆に関するお願い～カリキュラム・マトリックスの活用について～」を同封し、授業担当者に一層の協力を要請した。